

# 生徒による話し合いにおけるメタ対話表現の活用

— 中学校国語科を対象に —

学籍番号 179973  
氏名 佐古 真広  
主指導教員 寺嶋 浩介

## 1. 背景と目的

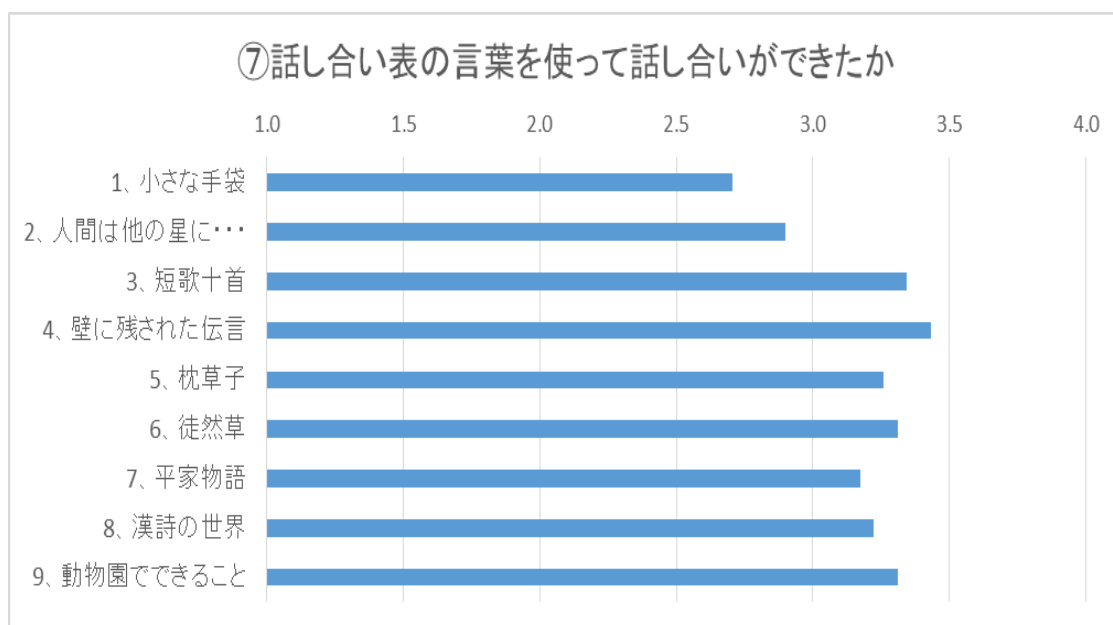
これからの教育で育成すべき資質・能力の一つとして、メタ認知能力が挙げられているが、井上（2007）によると、メタ認知能力や態度を養う方法の一つとして、集団思考としての討論や話し合いをすることが効果的であるとされている。コミュニケーションにおけるメタ認知に着目し、村松（2001）は、「対話を深めるメタ対話表現」を活用して話し合いを行うことで、自らの思考活動そのものに注意が向けられ、意識化され、メタ対話能力を育てることができると述べている。そこで、本研究は話し合いにおいてメタ対話表現を活用することで、生徒のメタ対話能力を育成することを目的とする。

## 2. 話し合い表の作成

村松（2001）は、メタ対話能力を育てるために「対話を深めるメタ対話表現」を作成した。しかし、これらの表現の中には重複が見られる上、中学生には無理、あるいは日本人には馴染みにくいものも無いわけではない（村松 2001）。そこで、実践校においても活用できるように、村松の「対話を深めるメタ対話表現」（2001）をもとに、「話し合い表」を作成した。村松が作成した「対話を深めるメタ対話表現」（2001）の、2「自分の言いたいことを明確にする」、6「相手の根拠を問う」、7「相手の言いたいことを補う」、14「自他の考えを並置して違いを際立たせる」、16「二人の考えの共通性を表現する」の5つを抽出して、生徒が活用しやすいような表現に改めた。また、この表現だけでは、生徒がどのような流れで話し合いを行えばよいのかわからないと考えられるので、阿部（2011）において活用されていた、「グループの話し合いの進め方」をもとに、話し合い表を作成した。この話し合い表を利用し、話し合い活動を行った。

## 3. 授業実践と評価

今回の実践は、生徒がメタ対話を話し合いにおいて活用することができたかを検証することを目的にした。作成した話し合い表を活用して話し合いを行い、話し合い後においては、今回の話し合いについてアンケートを通して振り返って自己評価させた。アンケート項目は、話し合い表をもとに作成し、よくできた、できた、あまりできなかった、できなかった、の4件法による項目を設けた。今回の実践では計9つの単元を実施した。以下のグラフは「話し合い表の言葉を使って話し合いができたか」の質問の結果である。この結果から、4回目からメタ対話表現を話し合いに活用することができている生徒が多いことがわかる。また、ほかの質問項目にもその傾向が見られた。



## 4. まとめと今後の課題

授業実践の結果及び考察から、生徒による話し合いにおいてメタ対話表現を活用するためには、大きく以下の4つの課題があると考えられる。

- 1、話し合いにおいて司会を上手く機能させること
- 2、話し合いのテーマは考えを比較することでより学びが深まるような内容である必要があること
- 3、古典で話し合って考えを比べて、学びが深まるようにするためには、すべての生徒が古典を解釈して味わう段階に達している必要があるということ
- 4、生徒がメタ対話を話し合いにおいて活用することができるようにするためには、継続的に話し合いを行い、話し合いを習慣化する必要があるということ

これらの課題から、生徒による話し合いにおいてメタ対話表現を活用するためには、「生徒同士が話し合える関係であること」と、「生徒が授業の内容を十分に理解していること」の2つの条件が最低限必要であると考えられる。話し合える人間関係である環境と、テーマについて考えられる知識の2つが備わっていなければ、話し合いを行うことはできないと考えられる。